

「きみが、そんなに言うなら、きつと大切な約束なんだろう。じゃ、残念だが。また、会おう。」

よく日、小さな町のかたすみで、たったひとりのお客さまを前にして、あまりうれない手品師が、つきつきとすばらしい手品を演じていました。

17 山本先生の仕事

やまもと

山本先生の机は、部屋のいちばんおくに置かれている。雪子が見るのは、いつもその前にきちんとすわっている先生の姿である。机の上には大きさまの筆、大きなすずり、そして机のまわりには古びた本が積み重なっている。先生は雪子と恵子を前にすわらせ、こまめに筆を動かして郵便物などの整理をしながら、話をなさる。先生の手先を見つめると、筆が生きもののように動く。雪子にとっては、筆の動きを見つめるのが先生の前にすわる楽しみの一つでもある。

雪子の家は山本先生の家に近いので、小さいころから時々、先生に習字を教えていただいている。最近友だちの恵子も仲間入りしたのである。

山本先生は、おつとめが終わってから二時間も電車に乗って書道の先生のと

ころへ教わりに行っていたことがあるそうだ。そのころ習ったという、すり切れたお手本を見せていただいた。

「これは万葉集まんようしゅうといって、日本で一番古い歌の本を写したものだ。むかしの人はこうして筆で自分の読みたい本を写したのだ。」

雪子はおどろきと同時に、そこにむかしの人の生活の一面を見たような気がした。

「先生は、万年筆まんねんひつのような便利なものがあるのに、なぜ筆ばかり書かれるのですか。先生は、むかしの人のまねをなさっているのですか。」

雪子になつとくしかねるようにたずねると、

「いや、わたしだつて万年筆を使ったり、ワープロをうったりする。」

先生はわらいながら話された。しかし、雪子の疑問ぎもんはとけなかった。

今日も、雪子と恵子は山本先生のところへ行く。先生がかわいがっているバ

ラのアーチには、黄色い花が満開である。ふたりはアーチをくぐり、そつとげん関を開ける。

「やあ。」

と先生の声。見ると、先生の額ひたいから玉のようなあせ。部屋に入るなりふたりは、

「あつ。」

と、息をのんだ。そこには、今書きあげたばかりの作品があった。

たたみ二じょうほどもある大きな

紙に、黒く太い勢いのいい曲線が

舞まっている。何と読むのか分からないが、雪子も恵子もその作品にすいこまれ



ていきそうな感じがした。

「今度できるビルの中にかけるのだ。新しい建築けんちくに合うような作品にしたいと工夫したんだ。君たちどう思うかね。」

先生の方からたずねられて、雪子たちはどぎまぎしてしまった。先生は、さらに続けて、

「むかしの日本では、よく床とこの間に字まの書いたかけじくがかざられていた。今の日本では、家の様子もだいぶむかしとかわってきた。そこに似合うにあような作品を書かなければ、美しいと感じられないだろう。古い日本の文化を守ることは、古い文化を生かしていくことなのだ。」

雪子は先生の話聞き、「古い日本の文化って何だろう。文化と習字と関係があるのだろうか。」と考えた。ますます疑問が深まるばかりだった。

雪子は家に帰って、辞書を引いてみた。

それから、母に聞いてみた。

文化——自然を人間の生活に役立つように
かえていく活動が作り出した成果せいか、芸術げいじゆつ
書道——文字を毛筆で書く芸の道、書芸

ますからね。」

と話してくれた。雪子は自分の疑問が少しずつとけていくような気がした。「むかしの人は字を書く必要があつて筆を使ったのだろう。その字をだんだん美しいものにしようと努力していったにちがいない。」

雪子は山本先生がいつも筆をもって仕事をしていらつしやる意味が分かるような気がしてきた。

「書道は中国から伝わったものだそうだけど、日本の古い文化といえるのではないかしら。むかしから『書の名人』と言われる人が日本にも何人かいた

雪子と恵子は相談して、山本先生の作品のかけられているビルに行ってみた。入り口を入ると、広くゆつたりとした空間がある。そのかべに、山本先生の作品はどつしりとかけられている。白と黒以外の色どりはないが、雪子には、まわりの様子にとけこんで美しく感じられた。

雪子と恵子は、帰り道、ふたりで話し合った。

「わたし、今まで、習字の時間はただ字を書くだけでつまらないと思っていたけど、少し考えがかわったわ。」

「わたしもよ。山本先生の仕事の大事なことが分かったわ。」

「日本にはすばらしい文化があったのね。」

「まだほかに、たくさんあるんじゃないかしら。」

ふたりは、何かしらむねのふくらむような気持ちになっていくのだった。

18 ブランコ乗りとピエロ

今年も、都にサーカスがやってきた。

満員のサーカス小屋に、開幕かいまくを告げるファンファーレが鳴りひびいた。大王アレキスを招まねいての、サーカスの初日。ゲートを走り出る馬の衣装いしやうも、一段いちだんときらびやかだった。きれいな曲芸で観客を楽しませた馬たちがゲートの中に消え去ると、サーカスの花形、空中ブランコが始まった。

ブランコ乗りたちが空中をまう。二人組み、三人組みと技わざが高まるにつれ、はく手は大きくなった。演技えんぎを終えて、高いぶ台から手をふるブランコ乗りたちに、観客はおしめない声を送っていた。そのとき、一人ひとが再びブランコに飛び乗った。

「いったい何が始まるのか。」

17 山本先生の仕事

4-7) 郷土や我が国の文化と伝統を大切に、先人の努力を知り、郷土や国を愛する心をもつ。(愛国心)

1 主題設定の理由

〈ねらいとする価値について〉

この資料のねらいとする価値は、愛国心である。愛国心は、日本人としての自覚をもって国を愛し、国家の発展に尽くそうとすることである。更に高学年においては、国民としての責任を自覚して、国家の発展に尽くそうとすることを、主な内容としている。日本に昔から伝わるすぐれた伝統や文化に誇りを持たせ、日本人として文化を守り続けていこうとする気持ちを育てていくのが、真の愛国心であると考えられる。

〈子どもの実態について〉

五年生頃になると、日本の国土の美しさを知り、伝統的文化に関心を持ち始めている。けれども、日本の国を愛するということはどういうことか、いまだ漠然としているところがある。ましてや、昔から伝わる日本の伝統的文化を、守り続けていこうとする気持ちなども少ないのも当然である。そこで、自国の伝統や文化についての認識を深め、日本人としての誇りを持たせると同時に、国を愛する気持ちを少しでも育

てたいと考える。

〈資料について〉

雪子は、山本先生が昔の人のように筆で書いたり、練習したりすることに疑問を感じる。更に先生は、現代建築に合う作品を作ることが、古い日本の文化を守ることになるという。ますます疑問を深めた雪子は、辞書を引いたり、母に聞いたりする。そして、山本先生の作品がかかっているビルディングを見に行き、書と文化を理解していくのである。

この資料を通して、山本先生の言動に疑問を感じながらも、だんだんと山本先生の考えを理解していく雪子に共感させたい。また、日本に昔から伝わる文化に優れたものがたくさんあること、これからわたしたちが、誇りをもって伝統や文化を守り続けていくことの大切さを感じとらせたい。

2 ねらい

日本には、昔から伝わる優れた文化があることを知り、文化を大切に守っていこうとする心情を育てる。


日本には素晴らしい文化がある。

まわりの様子にとけこんで美しい。

新しいビルディングにかけた作品

だんだん美しいものになろうと努力

山本先生の仕事



小まめに筆を動かす。便利なものがあるのに。郵便物まで むかしの人のまねか。

「あっ」

書きあげたばかりの作品 作品にすいこまれそう。

「古い日本の文化を守ることは古い文化を生かすことだ。」

むかし——字を書く必要があつて

□板書

3 展開

学 習 活 動	支 援 上 の 留 意 点
<p>(1) 日本に昔から伝わる文化にはどんなものがあるか発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 日本に昔から伝わっている文化や伝統にどんなものがありますか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ねらいとする価値にかかわる意識がもてるようにする。 ・ 身近にある日本古来の伝統や文化について補説しながら、理解を深められるよう配慮する。(祭り、生花など)
<p>(2) 資料「山本先生の仕事」を読んで、雪子の気持ちや考えについて話し合う。</p> <p>① 資料を読んで感じたことを発表しましょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 山本先生は、いろんな物を筆で書いたりするので根気がある。 ・ 日本の文化を現在に生かしているところがすばらしい。 ・ 山本先生のしたことや考えたことに疑問を感じ、辞書を引いたり、母に聞いたりしてその問題を解決しようとしたところがすばらしい。 <p>② 山本先生の前に座っていた雪子はどんな疑問をもったのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 万年筆を使えばいいのに。 ・ どうして昔の人のまねをするのだろう。 <p>③ 先生の作品を見たり、話を聞いたりして、雪子はどんなことを感じましたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 古い文化を守っていくことはどういうことか、ますます疑問が強くなった。そして、どうしてもその疑問を解きたくなくなった。 <p>④ 雪子は自分の疑問をどのように解決し、どんなことがわかりましたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 辞書を引いたり、話を聞いたりした。(文字を筆で書くことは必要感から始まり、美の追求へと進んでいった。) ・ 先生の作品が展示されている所へ見に行った。(回りと調和した美しさを感じ、古い文化を生かすということが分かった。) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 書写に対する自分の考え方や授業中の態度と比較して話し合い、共通の問題意識がもてるようにする。 ・ 山本先生の行動に疑問を持つ雪子に十分共感できるようにする。 ・ 自分が感じた疑問を積極的に解決しようとした雪子の気持ち、日本の文化のすばらしさに気付かせるもとなったことを理解できるようにする。 ・ 今まで何とはなしに、日本の文化に接していた自分に気付くようにするとともに、新たな気持ちで接していこうとする心情をもてるようにする。
<p>(3) 古くから伝わる日本の文化に対する自分たちの考えについて振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 古くから伝わる日本文化に対してどんな気持ちをもっていましたか。 ・ とくに考えてみたことがなかった。 ・ 先生のような考えで習字を書いている人がいることをはじめて知った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 文化に対する教師の考えを話し意欲がもてるようにする。
<p>(4) 学習のまとめについて、教師の話聞く。</p>	